

シェアすること。 で見える未来。

札幌オオドオリ大学
学長

猪熊 梨恵



最近、気になる言葉がある。それは「シェア」。日本語では「共有」と訳されることが多いこの言葉。札幌オオドオリ大学（以後、ドリ大）でも昨年の夏に「シェアするところ” サイクルシェアリングしよう”」という授業を実施した。きっかけは、まちで実施されていたポロクル。サイクルシェアリングの実証実験だ。

まちの中で仕事をしていると、ちょっとした移動が必要となる時がある。歩くにはちょっと遠いけど、地下鉄やタクシーに乗るには近いという場所への移動。そうすると、自転車が移動手段として丁度いい。しかし、自分の自転車を所有するには難点があった。それは、自転車の駐輪所の少なさと、盗難の危険だ。私にとって、ポロクルはこの2つの悩みを解決してくれるものとなった。自転車をシェアするのだから、自分の自転車を持たなくて良いので盗難の危険は無い。そして、専用のポートがまちの中に点在して設置されていたため、ポートの場所を把握していれば、安心して自転車をとめることもできた。また、自転車は排気ガスが出ないエコな乗り物。それだけでもなんだか心地よく移動できる気分になってしまう。

さて、授業では実体験もふまえて、ポロクルのユーザー（＝シェアを実践する人）が増えると、どのような社会変化がつくられていくのか知りたかった。そこで、先生には札幌をはじめ全国の街でカーシェアリング事業を展開しているウインドカー株式会社 代表取締役の須賀原さんをお呼びし事例などをお聞きした。

車を所有している人が多い昨今、実は1台毎の実稼働時間がとても少ないそう。ウインドカーはそんな車の待機時間を減らし、用途に合わせてリー

ズナブルに車を使うシェアシステム。カーシェアリングシステムを利用している方は、1回ごとの利用時間や使用金額を認識することで、CO₂の排出や削減が目に見えてわかり、移動にかかるコストを必然的に知ることとなる。シェアシステムを利用することで、自然と自分の動きを管理し、計算して動いている様なニュアンスを感じとった。また、利用される方はその後、徒歩や公共交通機関の利用が増え、いままで車で素通りしていたまちを巡り直し、再発見するきっかけとなっているという。

シェアシステムが進んでいるスイスのMobility社会員の移動手段を、システム使用前、使用后で比べてみると、なんと、自動車の利用は約1/3ほどに減っているそう。そして、公共交通機関利用や徒歩が増える結果に。今まで家から会社や買い物先まで全部車で移動していた人にも、車を使うところ、使わないところの選択の幅が広がったそうである。



まちの中に設置されている専用のポート

この授業の中で印象的だったのは、須賀原さんが「シェア」という言葉を正確に日本語に訳すなら「結」という漢字が当てはまる、とおっしゃっていたことだ。まだ車の交通量が少なかった時代の札幌は、子供が安全に遊べる道端も多く、近くの商店街に買い物に行き、各地域が賑わっていた。そんな地域を愛し、人と人との結びつきを生み出すのが「シェア」の心ではないかと思う。そして、その人と人が出会う舞台となっているのは「道」である。道に人が集まり、会話しお互いの情報をシェアし合う。そこにはしがらみが無く、フラットな関係。損得では無い価値観が道という舞台には存在していると思う。

2011年3月12日、まちの真ん中に新しい道ができる。道の名前は「札幌駅前通地下歩行空間」。ご存知の通り、既存の地上部の駅前通りと上下平行して地下に設けられる新しい道だ。札幌駅周辺と大通、そして昭和47年の札幌オリンピック時に、地下鉄南北線の建設と合せて、「地下街ポータルタウン」が建設されているため道はすすすきのまで続く長い道となるのだ。

札幌市では「都心部の魅力を向上し、その活性化を図る一環」という目的を持ち作り進めた。歩くだけの通路ではなく、通路の両側には「憩いの空間」を設け、イベントや展示、オープンカフェなどにも使えるという。

この記念すべき開通にあたって、まちが動き出した。今までメディアではライバルとして掲げられた、大通と札幌駅が一緒になって開通をお祝いするのだ。8つの商店街、5つの百貨店、15の専門店が集まり、札幌駅前通地下歩行空間の開通に合わせて、合同の企画を実施する。目的は明確だ。共同で手を組み、販促を行なうということ。そして、回遊性の向上である。

まちは一本の新しい道によって、お互いに情報や気持ちをシェアし、一つのまちとして動き始める。

また、大通側では最近面白いスポットもできた。Odori Community Cafe KOGUMA (札幌市中央区南2条西3) である。大通周辺の情報発信、交流の場、イベントスペースとしての利用など地域活性化を目的に運営されている。私もこの運営の



ポロクルの実体験も行われた

メンバーの1人として関わっているのだが、面白い事例ができはじめてきた。このスペースを利用し、まちの託児所として期間限定で開設されたのだ。去年の末、11日間だけの開設となったが、まちを利用するお母さんにとってはまちの真ん中に子どもを預けると、なにかあった時に買い物途中でも直ぐに帰ることができるから安心する。との声が多かった。一つの場所をみんなでシェアして、用途がその都度変化していくこと。一つ一つのお店では賄えきれない部分をみんなでシェアすることによって現実化することができるのだと確信した。

交差点も道の一部。

道が混じる様に、お互いの想いを「シェア」することによって、新しい道が切り開かれる。今回、文中に出て来たアクションが5年後、10年後どの様に成長していくのか、自分ごととして今後も取り組んでいきたいと思う。

猪熊 梨恵 Inokuma Rie

1985年、札幌生まれ。札幌市立高等専門学校 インダストリアルデザイン学科 建築デザインコースを卒業後、同校、専攻科に入学・修了。専攻科在学中にヘルパー2級を取得し、1年間休学しグループホームでヘルパーとして“介護”を体験する。卒業後、2008年春から株式会社インプロバイドに所属し、ライジングサンロックフェスティバルキッズエリアのディレクションを2年間担当。他、ワークショップやトークショーのディレクションを手がける。“クリエイターと企業をつなげる”ウェブマガジン mosslink・age(モスリンクエージ)を担当し、企業や札幌のクリエイターへのインタビュー情報を配信。2009年9月に退社後、札幌のまちをキャンパスに、札幌オドオリ大学 学長として奮闘中。
札幌オドオリ大学: <http://odori.univnet.jp/>